

# 人形劇製作を通じた表現力の育成 (Ⅱ)

安東 恭一郎・鈴木 政勝・瀬戸 郁子・藤元 恭子・松井 剛太・松本 博雄  
(幼児教育コース)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

## Development of Expressive Power through the Creation of Puppet Show (Ⅱ)

Kyoichiro Ando, Masakatsu Suzuki, Ikuko Seto, Kyoko Fijimoto, Gota Matsui  
and Hiroo Matsumoto

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

**要 旨** 本稿は本プロジェクトにおける4グループ活動の中の1グループを対象とし、その活動履歴を事例としながら、学生の学びの状況を考察していく。そしてその状況から本プロジェクトにおける到達点を実践的に検証するものである。このグループの人形劇製作では、劇団員の支援によって、子ども自身がお父さんや大人の価値に気づき、目を向けていく過程を人形劇・表現として演じることができるようになる過程を確かめることができる。

**キーワード** 人形劇 Web支援 授業記録 伝えたい気持ち コミュニケーション

### 1. はじめに

本研究報告は2部構成となっており、第1部(別稿)では、プロジェクトの全体構想と取り組みの全体像、人形劇に取り組んだグループそれぞれの課題と取り組み、などを提示すると共に本プロジェクトの到達点を示している。

第2部(本稿)では、第1部で報告できなかった各グループの具体的な取り組みの中で特に脚本制作について考察する。ここでは、本プロジェクトにおけるグループAの活動履歴を提示しその取り組みを詳述し考察することとする。

### 2. 第1回構成台本推敲原稿と添削指導

#### (1) グループ別構成台本の準備

人形劇製作第1回授業に先立ち、各グループにWebを通し第1回授業までに以下のような課題に取り組むよう指示された。

<目的>表現したい事柄を脚本化する。

<目標>第1回目までに取り組む目標

- ・3～4人で構成されるグループをいくつか作り、それぞれで10分程度の人形劇の脚本を作成する。
- ・作成した脚本をもとに、必要な物品リストを作成する。

<取り組み内容>

- ①原案の選定

グループ内で演じたい物語を選定する。扱う物語は一つに限定する必要はなく、必ずしも原作を用いなくてもよいが、登場人物の人数や小道具の使用など、物理的に操作できることを前提に考える。

### ②テーマの決定

選定した原案について主題（テーマ）を決定する。対象の年齢や人数を踏まえたうえで自分たちが何を伝えたいのかを明確にする。テーマは複数あってもよいが、テーマが多くなるとうまく伝わらない場合があるので注意。原案の選定とテーマの決定はどちらが先になってもかまわない。

### ③構成台本の作成

大まかな劇の粗筋を作成したのち、その物語を構成する要素を場面ごとに箇条書きにて表記する。台詞は入れず客観的な動きのみで劇の構成を考える。人形劇の表現をどのように取り入れると効果的なのかを検討する。タイトルもここで決定する。

## (2) グループAの構成台本と添削指導

このような指示を受けて、グループAは以下のような構成台本をWeb上に提示した。

### ・グループA第1回構成台本

原題：ねずみのよめいり

テーマ：家族愛

タイトル：僕のお父さん世界一

登場人物：子ネズミチュウ吉、父さんネズミ、母さんネズミ、おひさま、雲、風、壁

一場：お家にて・・・

明日は家族3人でピクニックに行く予定だが、天気は大雨。明日まで止みそうにない。

そこで父さんネズミに雨を降らせないように頼むが、「お父さんにはそんな力がないんだ。ごめんね」と言う。

チュウ吉は「雨に負けちゃうお父さんなんて大っきらい！もっと強い世界一のお父さんを探すんだから」と言って家を飛び出した。

二場：おひさま・雲・風と出会う

しばらく走っていると、遠くにおひさまが見えた。

チュウ吉はおひさまの所まで行き「僕のお父さんになってください」とお願いしたが「僕より強い者がいる」と言われ、雲・風・壁と次々とお願いしていく。

三場：壁と出会う

チュウ吉は壁をお願いに行った。

壁は「私より強い者がいる。それは、ねずみじゃ。」と教えてくれる。

お父さんが世界一だと気付いたチュウ吉は、壁に魔法の言葉「ごめんね」を教えるもらい、勇気を出してお家に帰って行く。

四場：お家にて・・・

心配していたお父さんとお母さんが迎えてくれた。

チュウ吉は「さっきはひどいことを言ってごめんなさい」と勇気を出して伝えた。お父さんも許してくれ、今度こそピクニックに行けるように仲良く3人でてるてる坊主を作った。

チュウ吉は「やっぱり僕の家族は世界一！」と感じた。

グループAが提出したこの構成台本に対して川田講師は以下のような支援をWeb上に書き込んだ。

テーマが硬くなりすぎているので、幼児向けでは無いような感じがしてしまいました。

「うちのお父さんはエライ」というようにくだけた表現でいいかなと思います。特に難しいのは一場と二場のつながりでしょうか？

最初のシーンでは雨とねずみの関係の話なのに、次のシーンでは太陽に飛んでいます。雲のポジションは？

ということでここはひとつ、子ねずみがピクニックに行きたいとせがむが父親は行かないと言う。

すねた子ねずみは家を飛び出し、代わりの父親を探していく、といった内容にすれば単純でわかりやすくなると思います。

がんばってください。

この支援を受けたグループAは第2回推敲を

Web上に以下のように提示した。

(3) 第2回構成台本推敲原稿と添削指導

原題：ねずみのよめいり

テーマ：家族愛

タイトル：僕のお父さん世界一

登場人物：ネズミのチュウ太、お父さん、お母さん、おひさま、雲、風、壁

・グループA第2回構成台本

一場：お家にて・・・

ある日曜日、ねずみのチュウ太はお父さんにピクニックに行こうとせがんだ。

しかし父は仕事で行けないので、次の日曜日に行こうと言われる。

次が待てないチュウ太はすねて「今日一緒にピクニックに行ってくれないお父さんなんか大きらい。ピクニックに一緒に行ってくれるお父さんを探すんだ」と家を飛び出す。

二場：おひさま、風、雲と出会って

チュウ太はおひさまのところまで行き、「僕のお父さんになって、一緒にピクニックに行こうよ」とお願いしたが、「僕は雲さんが来たら隠れてしまうから、一緒には行けないな。ごめんね」と言われる。その後雲や風にもお願いするが、断られる。

三場：壁と出会って

そこで今度は壁にお願いに行ったが、「何で家族で行かないの？」と聞く。チュウ太は「だって今日お父さんは仕事で行けないって言うんだ」と言う。

すると壁は「お父さんは君たちのためにお仕事を頑張っているのだから？」とチュウ太を諭す。

チュウ太はお父さんと仲直りをするための魔法の言葉を壁から教えてもらい、家に帰ることにした。

四場：お家にて・・・

家に帰ると、お母さんと仕事から帰ってきたお父さんが迎えてくれた。

チュウ太は「さっきはひどいことを言ってごめんなさい」と勇気を出して伝えた。

お父さんも許してくれ、次の日曜日には一

緒にピクニックに行く約束をした。

チュウ太は「やっぱり僕の家族は世界一！」と感じた。

グループAが提出した第2回構成台本に対して川田講師は以下のような支援をWeb上に書き込んだ。

第2稿を読んでみて、子ねずみの年齢が中学生から幼児くらいに下がったような気がしました。今のほうが幼稚園の子どもたちには、話に入りやすくいいと思います。全体の流れはまとまっていて面白いと思います。

この話での一番重要な部分は、四場ということになりますが、子ねずみが家族のことを世界一だと思うに到るためのドラマが必要だと思います。そのための壁のトスアップはとても重要です。例えば…

・壁が父ねずみをほめる

・子ねずみは半信半疑で家に帰る

・父ねずみが帰ってくる

☆何かが起こる

・子ねずみは父（家族）のことを世界一だと思う。ちゃんちゃん。

以上は一例です。子ねずみの（子どもたちの）気持ちになって考えてみてください。

修正は2稿目を使用してください。

同時進行で最初の辺りは脚本に取りかかり始めてもかまいません。がんばってください。

さらに続けて第1回支援において取り組む人形製作に向けての指示も以下のように書き込まれた。

（11月13日・第1回授業）13日から人形製作に入るので、その前に人形の話をしたと思います。ネズミ（父、母、子）の人形は立体の棒人形、または板人形あたりがいいと思います。板人形はベニヤで作ると丈夫で面白い人形になるのですが、厚紙や板ウレタンなんかでもできます。また当日説明します。

太陽や風などはペーパーサートにするのがいい

と思います。まずは厚紙を用意しておいてください。13日には脚本の話もしますので、質問等があればまとめて置いてください。

このように、第1回目の授業が行われるまでにWeb上で、構成台本の見本の例示、それを受けて構成台本の提示・添削指導が2回に渡って行われ、4グループがおおよその人形劇製作の方向性を持てる段階までに至っていた。

### 3. 第1回授業・構成台本へのアドバイス

#### (1) グループA・構成台本への支援

川田講師は、グループAとの話し合いの中で構成台本の課題は「ねずみの子どもが壁さんに諭されて改心する」という部分が物語の山場であるのにも関わらず、葛藤も迷いもなしに簡単にお父さんの存在価値を認め「お父さんは世界一！」と結論づけている、ことを指摘した。

この場面に対して「この構成台本では、お父さんの良さが壁さんから諭されることによって気付くということになっているが、この気付きを子ども自身によって得られるような展開にできないか」と示唆を受けた。

そして、その展開例として「ねずみの子どもたちは、お日さまや雲さんにお父さんの代わりになってくれるよう頼むが断られる、というところまではいいだろう。最後に壁さんに頼む場面で構成台本では壁さんが子どもを諭すとなっているが、ここを「えっ？ピクニック？ほく動けるわけじゃない」といって子どもたちの要求の実現は、本来父親にしか成しえないことに気付かせる役割をさせる。

壁の役割は子どもたちを諭すことではなく、子どもたちにお父さんの置かれている立場に目を向かせることにしてはどうか」といったアドバイスをした。

ここで指摘されたお父さんの置かれている立場とは「家族のことを思って、仕事に対する責任を果たし、それとともに子どもたちを見守ることも忘れない、その全体を見ながら家族を大切にしている」といった全体を見渡すお父さん

像の確認である。

そして、そのことがわかる場面として子どもたちのしたいこと、ほしいものを説明されなくてもきちんと知っていて、必要な時には実現してくれる>といったお父さん像を下敷きにして脚本化してはどうか」とする具体的提示を受けた。

また、題名に関しても「お父さんは世界一！」とすると、劇を観る子どもたちは最初から結論を知ってしまうことになるので、例えば「お父さん、お日さま、雲、風、壁さん」といった意味不明の方が「いったい何が始めるのだろうか？」と期待感を持たせやすい、といった助言も受け、検討された。

#### (2) 第2回授業までの課題・「脚本作成」の取り組み

第1回授業後に指示された予定は以下の通りであった。

- ・ 11月下旬までに脚本第1校をアップロードし川田講師からコメントをもらう
- ・ コメントを参照し、脚本第2校をアップデートする。
- ・ 第2回授業（12月4日）までに各グループで人形製作を進めておく。

### 4. グループA・第1回脚本案（11月20日提出）の提出と添削

#### (1) 第1回脚本案

グループAは、第1回授業までの支援をもとにグループ内討議を行い、現在の課題に対して構成台本をもとに以下のような詳細な脚本案を提示した。

タイトル「チュウ太とお父さんの日曜日」

一場

チュウ太：ねえねえお父さん、ピクニックに行こうよ

お父さん：ダメダメ！お父さん今日は仕事なんだ。

チュウ太：えー！日曜日なのに？

お父さん：仕方ないだろ、今日は仕事だから。

あ、来週なら行けるぞ！

チュウ太：今日がいの！

お父さん：だーめ。今日は仕事！

チュウ太：じゃあもういい！分かった。今日一緒に行ってくれる誰かをさーがそう！

(チュウ太が家を飛び出す)

## 二場

チュウ太：あ、太陽さんみーつけた！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに行かない？

太陽：なんでお父さんと一緒に行かないの？

チュウ太：だってお父さん行ってくれないんだもん！仕事なんだって。

太陽：行きたいんだけどさあ・・・私、雲さんが来たら隠れちゃうから、一緒には行けないなあ。

チュウ太：そっかあ、残念。じゃあまたねえー！

太陽：お気をつけて！

チュウ太：やあ、雲さん！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに行かない？

雲：なんでお父さんと一緒に行かないんだ？

チュウ太：だってお父さん行ってくれないんだもん！仕事なんだってえー。

雲：行きたいんだけどさあー、俺、風さんが来たら飛ばされちゃうからなあ。途中でどこかに飛んで行っちゃうかもしれないぞ！

チュウ太：そっかあ、これまた残念！じゃあまた・・・(ピューン、と風がやってくる)

雲：あ～れえ～(風に飛ばされる)

チュウ太：ん？あれ！？雲さん？雲さあーん？

(風がチュウ太にぶつかる)

チュウ太：あ、痛！ん？誰だ？

風：あたいだよ！

チュウ太：あ、風さんかあ！僕と一緒にピクニックに行かない？

風：なんでお父さんと一緒に行かないの？

チュウ太：だってお父さん行ってくれないんだもん！仕事なんだってー！

風：行きたいんだけどさあー、あたい壁があったら進めないんだよねえ。

チュウ太：そっかあー、これまた残念。じゃ

あねえ！

## 三場

チュウ太：あ、壁さん発見！！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに行かない？

壁：なんでお父さんと一緒に行かないんだ？

チュウ太：だってお父さん行ってくれないんだもん。仕事なんだってー！つままないよね！

壁：そうかあー。行きたいんだけどなあ…わしは動けんからなあ…でも君のお父さんは動けるじゃないか！

チュウ太：だけどー、今日行ってくれないんだもん。また今度だって。僕は今日行きたいんだ！

壁：今度だったら連れていってくれるって？

チュウ太：うん…。来週ならいいんだってー。

壁：今日お父さん仕事なんだろ。ところで、どうして君のお父さんは仕事頑張っていると思う？

チュウ太：うーん？なんでだろう…

壁：君がおいしいご飯を食べられるのは誰のおかげ？君がおもちゃで遊べるのは誰のおかげだい？よく考えてごらん！

チュウ太：うーんと、うーんと…お父さん？

壁：そうだよ！お父さんは君たち家族のためにお仕事を頑張ってくれているんだよ。

チュウ太：僕たちのため？

壁：そう！お父さんがお仕事に行かなかったら、明日からご飯が食べられないかもしれないぞ！

チュウ太：えー、そんなの嫌だあー！

壁：だから今日は我慢して、君もお父さんのお仕事を応援してあげなきゃ。で、来週行ったらいいじゃないか！

チュウ太：分かったあー。(トボトボと歩きだす)

壁：暗くなる前にお家に帰るんだよ。

チュウ太：はーい…

## 四場

お父さん：ただいまー。

チュウ太：おかえりなさい。

お父さん：今日も疲れたなあー。あ、そうだ、

チュウ太！  
チュウ太：なにー？  
お父さん：今日はピクニックに行けなくて悪かったなあ…。  
チュウ太：うんー。  
お父さん：あ、そうそう。今日はチュウ太にプレゼントがあるんだ！  
チュウ太：え！？  
お父さん：あけてごらん！  
チュウ太：あー！僕のほしかったリュックサックだ！！  
お父さん：来週の日曜日はそれを持って一緒にピクニックに行こうな！  
チュウ太：うん！ありがとうお父さん！！楽しみだなあー！来週は絶対に行こうね！指切りげんまん嘘ついたら…  
(歌いながら終わっていく)

(2) グループA・第1回脚本案へのコメント  
グループAのアップロードした脚本に対して川田講師は以下のようなコメントをいれた。

「脚本はとてもシンプルで起承転結もあり、よくできていると思います。あとは、人形の動きなどをト書きで入れていってみましょう。

壁のシーンですが、全体に落ち着きすぎしてしまうように見えます。具体的に言うと、長い台詞があって人形はあまり動かさないとかです。子どもたちが飽きてしまう恐れがあります。それを回避するためには～主人公の年齢を客より少しだけ幼くしてみる～ことをおすすめします。

他はほぼいいと思いますので壁のシーンで簡潔に、言いたいことを伝えるにはどうしたらいいかを考えてみましょう」

このように、構成台本から脚本製作へと展開し添削を受け、第2回授業を迎えた。

## 5. 第2回授業・脚本の検討及び人形製作の開始

### (1) 第2回授業の内容

第2回授業では、第1回授業以降に課題として作成した「脚本」の再検討を行った。

### (2) グループA・脚本内容への支援

・講評  
グループAの提示した脚本はとてもシンプルで起承転結・メリハリもあってよくできている。課題としてはこのストーリーの重要な部分である「(第三場) 壁さんにお父さんをどのように語らせるか」そして「(第四場) お父さんと子どもとのやりとり」をどのように演出するのかについて検討が必要となる。以下に川田講師の支援について記す。

#### ・<課題1・壁さんのシーン>

チュウ太が壁さんとの対話でお父さんのすごさをわかってしまうと最後のシーンにつながらなくなる。

チュウ太がお父さんの凄さを受け入れてしまうと、第四場・お父さんとのシーンでお父さんがチュウ太に「リュックのプレゼント」をあげる場面が輝かない。だから第三場で壁さんがチュウ太にどのように語るのかが重要なポイントとなる。この脚本(第1回脚本案)の第三場は説明が多すぎる、第二場まではテンポよく展開してきたのに、第三場に入るとスピードがなくなり大人(中学生以上)を相手にしているような説明になっている。

第三場で特に重要なセリフ・部分は「チュウ太：行きたい！行きたい！行きたい！———い！」とそれに続く壁さんの言葉である。ここで壁さんが応える言葉・気持ちをどのように設定するのか、子どもの「その場の昂揚する感情」に対して大人がどのように対応するのかが課題となる。

この課題は幼児教育の実践場面で子どもの「昂揚する感情・言葉・態度」に対して教師・保育者が大人としてどのように対応すればいいのか、という問いともなる。

「行きたい！———」と声を出すチュウ太の気持ちはよくわかる。チュウ太・子どもは目の前の事、今、が全てで今すぐ行きたい、来週じゃあだめ。だから(連れていってくれるなら)お父さんでなくてもいい、太陽さんでいい、雲さんでいい、手近で実現してくれる人ならだれでもいい。チュウ太はここで壁さんに諭されても

決して納得していない、とりあえず大声を出して発散している。

壁さんに何か言われるけれど納得はしていない、仕方なく家に帰る、程度の状況にしたほうがいい。そうさせる壁の一言を考慮することが課題である。

・<課題2・お父さんのシーン>

お父さんがチュウ太にリュックをあげる場面をどうつくるかをよく考えること。

お父さんがチュウ太にリュックをあげた瞬間、チュウ太のテンションは一気にあがる。チュウ太はお父さんからリュックをもらうまで気持ちが乗っていない、その時さっとリュックが目の前に現れることで状況が一気にかわる。

この時、リュックがプレゼント用の箱に入っているとここに間合いができてしまう、箱に入れてしまわないほうが気持ちを連続できる。

お父さんがさっとリュックを出して、チュウ太が「すごい！僕のほしかったリュックだ！」と喜ぶことが「お父さんってすごい」という気持ちであり、お父さんに対する信頼になる。こうした状況となる脚本を考慮することが二つ目の課題となる。

(3) グループA・第2回脚本案

第2回授業後、脚本支援を受けたグループAは、早速指摘された課題「壁さんのシーン」「お父さんのシーン」についてグループ討議し、修正案を第2回・脚本案としてアップデートした。本稿では、課題への取り組み状況をより明確にするため、課題に対応した部分を特に提示することとする。(課題に対応したセリフ部分には下線を入れ、修正の状況を強調した)

タイトル「チュウ太とお父さんの日曜日」<一場、二場は省略>

三場 (課題1・壁さんのシーン)

チュウ太：あ、壁さん発見！！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに…って壁さん動けないじゃーん！

壁：なんでお父さんと一緒に行かないんだ？

チュウ太：だってお父さん行ってくれない

んだもん。仕事なんだってー！つまんなーい！

壁：今日じゃなくたって来週連れて行ってもらえばいいじゃないか。お父さんは毎日仕事を頑張っていて凄いんだよ。

チュウ太：やだやだ！今日がいいのー！

壁：今日は我慢するんだ。

チュウ太：行きたい！行きたい！行きたーい！

壁：もう…でも今日はもう遅いから暗くなる前に帰るなさい！

チュウ太：えー。

壁：きっとお父さんが凄いてことが君にもいつかわかるよ。

チュウ太：…うん…そうなのかなあー。わかったあ。

壁：寄り道せずに帰るんだよ。

チュウ太：じゃあねえー壁さん。(とほとほと歩きだす)

四場 (課題2・お父さんのシーン)

お父さん：ただいまー。

チュウ太：おかえりなさい。

お父さん：今日も疲れたなあー。あ、そうだ、チュウ太！

チュウ太：なにー？

お父さん：今日はピクニックに行けなくて悪かったなあ…。

チュウ太：うんー。

お父さん：あ、そうそう。今日はチュウ太にプレゼントがあるんだ！

チュウ太：なあに？

お父さん：じゃーん！！

チュウ太：あー！僕のほしかったリュックサックだ！！！

お父さん：来週の日曜日はそれを持って一緒にピクニックに行こうな！

チュウ太：うん！ありがとうお父さん！！

楽しみだなあー！来週は絶対に行こうね！

お母さん：2人ともー、そろそろご飯よー！

お父さん・チュウ太：はーい！

(テレビを裏返しておしまい)

#### (4) グループA・脚本案の課題に対する具体的支援

上記グループAの第2回脚本案に対して川田講師はWeb上で脚本見本を作成し、これを参照して課題を検討するように、との指示を与えた。グループAの課題は、「壁のシーン」「お父さんのシーン」であったが、第2回脚本案を提示した段階で「お父さんのシーン」は課題を乗り越えていたが、「壁のシーン」がまだ未解決であった。

川田講師がこの場面に対して具体的に提示した脚本（本稿では、一場、二場、四場は提示省略）は次のとおりであった。以下に、川田講師の示した第三場とグループAの脚本案をカッコ内に再掲し、修正案と併せて示す。

・修正案

##### 三場

チュウ太がトボトボ歩いていると壁にぶつかる。

チュウ太：あ、壁さんいいところに！！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに…って壁さん動けないじゃーん！

壁：お父さんと行けばいいじゃないか。

<壁：なんでお父さんと一緒に行かないんだ？>

チュウ太：だってお父さん行ってくれないだもん。仕事なんだってー！つまんなーい！

壁：仕事だったらしかたがないな。また今度連れて行っ…。

<壁：今日じゃなくたって来週連れて行ってもらえばいいじゃないか。お父さんは毎日仕事を頑張っていて凄いだよ。>

チュウ太：やだやだ！今日がいいのー！

壁：今日は我慢するんだ。

チュウ太：行きたい！行きたい！行きたー！  
——い！

壁：ふむ…でも今日はもう遅いから暗くなる前に帰りなさい。

チュウ太：えー。

壁：きっとお父さんはチュウ太君のこともちゃんと考えてくれてるはずだから。

<壁：きっとお父さんが凄いでことが君にもいつかわかるよ。>

チュウ太：…うん…そうなのかなあー。わかったあ。

壁：寄り道せずに帰るんだよ。

チュウ太：はい。（とほとほ歩きだす）

転換。

上記三場修正案とグループAの脚本案を比較してみると、グループAの壁さんのセリフはチュウ太に教え諭すような内容となっているのに対し、川田講師の示す壁さんのセリフでは、お父さんの凄さを強調するものではなく、チュウ太の気持ちが前面に出るものとなっている。

このように第2回授業後も脚本製作と添削指導が行われ、おおよそ脚本ができてきたところで、第3回授業を迎えることとなった。

#### 6. 第3回、第4回授業・段取り稽古

第3回授業は、脚本を基にしてセリフと動きを付けていく場面であった。グループAが準備した脚本を基にして川田講師が稽古をつけていった。

稽古では、セリフと人形の動きを関係付けていくことが求められた。人形劇が初めての学生たちにとってセリフがあるところでは人形が登場し何らかの動きをしている、というイメージがあったが、指導の中で、セリフだけがあって人形を登場させない、人形に大きな動きを与えてセリフを補う、セリフを言う人形に不自然な動作を与えない（しゃべりながら左右にゆすらない、一々言葉に合わせて手を動かさない）、などが指示された。

段取り稽古の振り付けは川田講師が学生に指示する形で行われたが、それぞれの場面では、まず学生に演じさせ、次にそれに対して具体的に人形を動かして詳細に演技をつけていく、という方法がとられた。

本稿ではこれら支援の中で、幼稚園上演会（本プロジェクト最終場面）で、グループAの上演で、特に園児たちが注目した第二場の段取

り稽古について詳述する。

以下、脚本のセリフのそれぞれの後のカッコ内が支援の状況である。

## 二場・段取り稽古

チュウ太：あ、太陽さんみーつけた！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに行かない？

太陽：なんでお父さんと一緒に行かないの？

チュウ太：だってお父さん行ってくれないんだもん！仕事なんだって。

太陽：行きたいんだけどさあ・・・私、雲さんが来たら隠れちゃうから、一緒には行けないなあ。

<チュウ太が、どのタイミングで太陽さんに近づくかを考えておく、ここであまり近づきすぎないほうがよい、舞台の中央あたりに両者を隔てたままで会話をする>

チュウ太：そっかあ、残念。じゃあまたねえー！

太陽：お気をつけて！

<話し終わったら、チュウ太が太陽さんと交差して袖右に消える、太陽さんは袖左に消える、そして幕の下をくぐって袖左からチュウ太登場、すると袖右から雲さん登場>

チュウ太：やあ、雲さん！ねえねえ、僕と一緒にピクニックに行かない？

雲：なんでお父さんと一緒に行かないんだ？

チュウ太：だってお父さん行ってくれないんだもん！仕事なんだってえー。

雲：行きたいんだけどさあ、俺、風さんが来たら飛ばされちゃうからなあ。途中でどこかに飛んで行っちゃうかもしれないぞ！

チュウ太：そっかあ、これまた残念！じゃあまた・・・(ピューン、と風がやってくる)

<ここで風さんが登場するのだが、風さんは小道具を準備しないで声だけで演出してみよう、風のヒューという声を皆で出してみよう、そし

て、雲さんが「アレー」と言って袖右側に飛んでいってしまう>

チュウ太：ん？あれ！？雲さん？雲さあーん？  
(風がチュウ太にぶつかる)

雲：あ～れえ～(風に飛ばされる)

<チュウ太は中央で上下の動きをする、この時、草むらの小道具をチュウ太の背後を勢いよく二回袖右から左に動かす、それで風は袖左から出てくるのでチュウ太は反転して左側を向く、そして再び右側を向いてチュウ太は上下に大きく動きながら走る動作をする、すると後ろから風がチュウ太にゴチンと当たる、チュウ太は大きくこける、そして立ち上がり人形を左右にゆすってセリフ>

チュウ太：あ、痛！ん？誰だ？

風：あたいだよ！

チュウ太：あ、風さんかあ！僕と一緒にピクニックに行かない？

このように第3回授業で脚本を仕上げ、段取り稽古をして人形劇のおおよその形が見えてきた。第4回授業では、これらの成果を授業内で発表会の場面を設け上演するまでに至った。以下第5節以降、グループAの取り組み全体を振り返り、その到達点と課題を考察していく。

## 7. 人形劇製作と支援の到達点

### (1) 人形劇・演出の力点

グループAの人形劇の主題は「お父さんは世界一！」ということであり、これは最初の取り組み時から最終上演場面まで一貫していた。課題として「お父さんのすごさ」をチュウ太がどのように気づき納得するのか、それをどのように演出するのか、ということであった。

グループAの学生たちは最初この人形劇で演じようとしていたのは、「世界で一番強い存在を尋ね歩くと最終的には<不動の壁>にたどり着くが、最強と思えた壁よりも強い者として、

壁に穴を開ける事ができるネズミ（それは、お父さんネズミ）こそが最強であった」という物語を人形劇にすることであった。

学生たちは人形劇取り組みの初段階では、人形劇とは「よく知られたストーリーを人形劇仕立てにアレンジすること」と考えており、学生たちが選んだ物語の背景に込められた「父親の意味や価値」について深く考え演じようとしていたわけではない。むしろ「価値ある者は、どこか遠くにいるのではなく、ごく身近にいるのだ」というメッセージを演じようとしていた。

#### (2) 人形劇製作で「思い」を伝える

ところが第1回授業で、この展開について指摘を受ける。すなわち「ねずみの子どもが壁さんに諭されて改心する」という部分が物語の山場であるのにも関わらず、葛藤も迷いもなしに簡単にお父さんの存在価値を認め「お父さんは世界一！」と結論づけているが、このような安易な展開では子どもたちに思いは伝わらない、と指摘された。

ここで学生たちは「人形劇で重要なのは、物語に沿って物語を演じるのではなく、思いを伝えること」を初めて知ったのである。

グループAにとってこれ以降の人形劇製作の意味は「父親の価値」をチュウ太（子どもたち）にどのように気づかせるか、教え諭すのではなく、自らがその素晴らしさに気づくような脚本製作と演技に取り組むことになった。

グループAにとっての人形劇製作とは、チュウ太（子ども）の精神的成長を描き出すことであり、子どもにとって身近だけれども不可解な父親の存在を改めて考えさせる演出が求められる過程であった。

最終的に仕上がり、上演されたグループAの人形劇は「物語をなぞる」のではなく、チュウ太の気づきと成長をチュウ太の目線から描き出すものとなっていた。

#### (3) 人形劇製作の喜び

でき上がった人形劇の公演は授業内だけではなく、学内及び幼稚園で実施された。ここで、グループAが演じた人形劇「チュウ太とお父さんの日曜日」を通して「伝えなかった思い」が

この劇を観る者にどのように伝わったのかはわからない。人形劇を上演した時点で確かめることができるのは、上演中の観客の反応である。

この人形劇では演じる者は舞台の後ろ側で動作をするので、観ている者の反応は幕を隔てて感じられる雰囲気や歓声で確かめることになる。それでも学生たちは自分たちのセリフや動作に対応してその都度歓声を上げる子どもたちとの一体感を、これまでに経験したことがない新鮮な体験として味わうことができた。人形劇を上演した直後に学生が「人形劇の面白さにはまりそうになってきた」と感想を述べていたが、これは人形劇製作の面白さが、上演し観るものと製作する者とが一体になれることの喜びに気づいた一場面だろう。

#### (4) 成長する人形劇

人形劇は映画と異なり、それを見せようとするとその都度演じる必要がある。学生たちはこのプロジェクトの後、三回上演の場面を持った。そこでは、それぞれ観劇者が異なると、同じ演劇内容であっても反応が異なることを実感することができた。

また、人形劇は演じる度に改善点を発見したり、内容補足や修正をしたりしていくことそのものが人形劇上演となっていた。人形劇製作は脚本から上演までが一つのサイクルになるが、上演をし始めてからがまた新たな出発点となると感じる事ができた。

## 8. 今後の課題

#### (1) 「思い」の確かめ

この人形劇で子どもたちに「思い」を伝える重要な場面は、チュウ太がお父さんの素晴らしさに気づく最終場面・第四場であった。

子どもたちは、この第四場におけるチュウ太と父親の会話のシーンを黙って観ていたので、表情からだけでは、どれほどのメッセージを受けとめていたのか読み取ることはできなかった。

人形劇を観ていた子どもたちが最も喜んだのは、第二場・後半の雲さんが風さんに飛ばされ

るシーンで、次に喜んだのは最後の場面でカレーを家族で食べる夕飯のシーンであった。

子どもたちがグループAの人形劇を観る中で、まず受けとめたのは活発に動き回る動きや繰り返しの場面、あるいは食事といった日常の楽しい場面などであった。

今回取り組んだ人形劇は「よく知られた物語」をベースにしていたので子どもたちは導入部分で親しみを持って受け入れることができた。また、動きのあるシーンや日常の知っているシーンについては楽しめたのだが、第四場を観る子どもたちは「知っている物語を知っているように演じてくれない」ので戸惑ったように見えた。

演じた学生たちも、第四場で反応が見えなかったもので、果たして自分たちのメッセージは子どもたちに伝えることができたのか不安を感じていた。そして、内容が複雑すぎたのではないかと、会話が多すぎたので子どもたちは理解できなかったのではないかと、心配していた。

## (2)「思い」を残す

子どもたちが、この翻案された人形劇全体と第4場を味わうためには、上演中の経験だけではなく上演後ゆっくりと流れていく時間が必要である。

子どもたちは、まず、自分の知っている物語と演じられた人形劇は、何が同じで、何が異なっていたのかを、自分なりに整理し新しい物語を受け入れていく。

そして、次第に、この人形劇はチュウ太が父親の価値や存在の意味に気づいていく過程であったことを知るようになる。

人形劇は演じて見せることで内容が直接伝わり反応が確かめられる面白さもあるが、そのメッセージはリアルタイムに伝わる訳ではない。

上演が終わった後、人形劇は子どもたちの記憶の中で反すうされ、多くのシーンは忘れ去られるが、いくつかの場面の記憶や言葉は残りそれらは「おり」となり、やがて意味を紡いでいく。

グループAが人形劇を通して伝えようとしたメッセージ「父親の価値そしてチュウ太の精神

的成長」は、上演中にリアルタイムに伝えることができない内容である。上演中にこの価値を伝えようとするならば、グループAの最初の脚本にあったように、子どもたちに父親の価値を言葉や台詞で教え諭すような人形劇を演じるしかない。

子どもたちが、このメッセージを受けとめるには、子ども自身の精神的葛藤が必要であり、教えられるのではなく自らが気づくことが求められるのである。

こうした気づきを求めるならば、子どもたちにとっての人形劇観劇体験を一回の上演場面として捉えるのではなく、上演後の記憶の世界も視野に入れた人形劇製作が求められるだろう。

上演中に反応が良いかどうかを上演の評価とするのではなく、子どもの記憶の中で成長し、それが「思い」となって伝わるような人形劇製作を今後取り組んでいくことを期待する。

## 謝辞

本稿は、平成22年度香川大学教育学部研究開発プロジェクト「授業「児童文化」における「演劇」活動を通じた表現力の育成」における研究成果の二部編成のうち第2部である。

本プロジェクトを推進するにあたり、「とらまる人形劇」の皆様・特に川田りょう先生には、人形劇製作において準備の段階からWeb支援、および授業内における学生支援まで多大なご協力をいただきました。心から感謝し御礼申し上げます。